



2022年度 第2回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2023年1月～6月)のポイント

海況

黒潮はA型^(※1)基調で推移する。

沿岸水温は、薩南～豊後水道は「低め」^(※2)～「平年並」^(※2)、足摺岬～紀伊水道外域は「やや低め」^(※2)～「やや高め」^(※2)、熊野灘～遠州灘～相模湾は「平年並」～「高め」^(※2)で暖水波及時に「極めて高め」^(※2)、伊豆諸島海域は概ね「高め」～「極めて高め」、房総～常磐南部海域は「平年並」～「高め」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

A型：流路南端が北緯32度以南

※2 平年並＝平年値±0.5℃程度、やや高め・やや低め＝平年値±

1.0℃程度、高め・低め＝平年値±1.5℃程度、

極めて高め＝平年値+2.5℃以上。

ただし、鹿島灘～常磐南部海域の基準は次頁末尾を参照のこと。

漁況(来遊量予測)

マイワシ

房総以北では前年並～上回り、相模湾以西では前年並～下回る

カタクチイワシ

引き続き低水準で、前年並～下回る

ウルメイワシ

全体として前年並

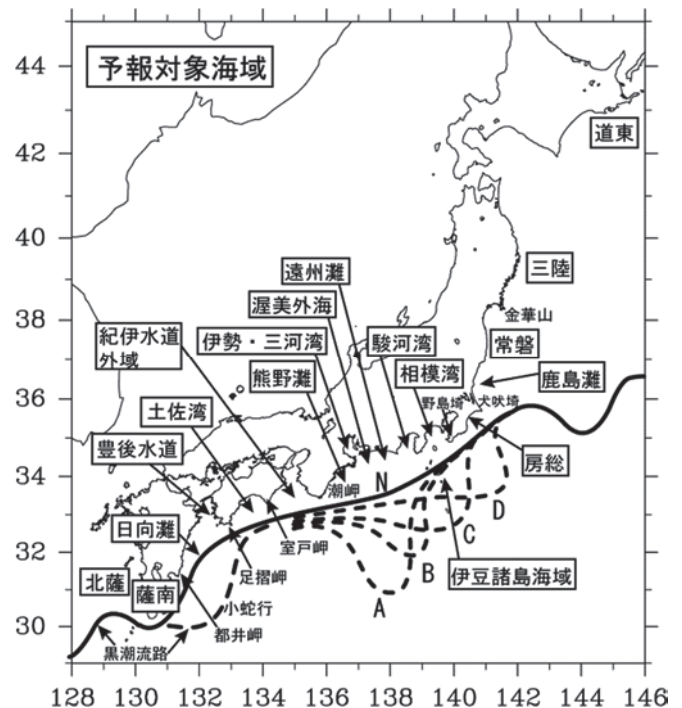
マアジ

前年並となる海域が多い

マサバ・ゴマサバ

マサバは低調であった前年並となる海域が多い。

ゴマサバは低水準。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当 企画調整部門(横浜) 上原

漁況：浮魚資源部(横浜) 福若、由上、古市、井元、木下、渡邊

海況：海洋環境部(横浜) 栗田、安倍

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2023年1月～6月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・ 都井岬～足摺岬沖では、接岸傾向で推移するが、一時的に離岸することがある。
- ・ 室戸岬～潮岬沖では、離岸傾向で推移するが、一時的に接岸傾向となる。

◎潮岬以東

- ・ 大蛇行が継続し、A型基調で推移する。
- ・ 蛇行北上部は概ね伊豆諸島海域の西側に位置し、熊野灘～遠州灘に近づくことがある。
- ・ 房総沖では、接岸傾向で推移するが、一時的に離岸することがある。

(2) 薩南～房総海域

- ・ 都井岬～足摺岬沖は、黒潮系暖水の影響が大きいですが、一時的に冷水に覆われることがある。
- ・ 室戸岬～潮岬沖は、冷水域となるものの、黒潮から暖水が波及することがある。
- ・ 熊野灘～遠州灘～相模湾は、黒潮の接近や黒潮系水の波及に伴い暖水に覆われる。
- ・ 伊豆諸島海域は、概ね暖水に覆われる。
- ・ 房総沖では、黒潮から暖水が波及しやすいものの、一時的に冷水が分布することがある。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 黒潮から暖水が波及しやすい。

(4) 沿岸水温

- ・ 薩南～豊後水道は、「低め」～「平年並」で推移し、暖水波及時には「高め」で推移する。
- ・ 足摺岬～紀伊水道外域は、「やや低め」～「やや高め」で推移する。
- ・ 熊野灘～遠州灘～相模湾は、「平年並」～「高め」で推移し、暖水波及時には「極めて高め」となることがある。
- ・ 伊豆諸島海域は、概ね「高め」～「極めて高め」で推移するが、一時的に「平年並」となることがある。
- ・ 房総海域～常磐南部海域は、「平年並」～「高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上
（鹿島灘～常磐南部海域では、平年並＝平年値±1.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.6～3.9℃程度、
（高め、低め）＝平年値±4.0～6.0℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±6.1℃以上）

経過（2022年7月～12月）（注：経過は図2を参照のこと）

(1) 黒潮

- ・ A型流路の大蛇行が継続した。
- ・ 7月～9月にかけて、蛇行部の西偏に伴い足摺岬～潮岬沖で大きく離岸した。
- ・ 7月～9月にかけて、蛇行北上部が遠州灘沖でS字状となり、黒潮屈曲部が熊野灘～遠州灘に接近することが多かった。
- ・ 9月下旬～10月上旬にかけて、蛇行北上部の黒潮屈曲部が黒潮から内側域に切り離されたことに伴い、黒潮が八丈島の南側を通過した。
- ・ 房総沖では、10月に著しく離岸した以外は概ね「平均的な位置」で推移した。

(2) 薩南～房総海域

◎薩南海域

- ・ 黒潮北縁は、7月は屋久島南付近の「平均的な位置」、8月は「離岸」、9月～10月は「平均的な位置」、11月は「接岸」で推移した。

◎潮岬以西

- ・ 都井岬沖では、9月まで離岸傾向、その後は概ね接岸傾向で推移した。
- ・ 足摺岬沖では、8月は「著しく離岸」、9月下旬～11月は「かなり離岸」で推移した。
- ・ 室戸岬沖～紀伊水道沖では、期間を通じて概ね「離岸」で推移したが、黒潮が熊野灘に接近した際に黒潮北縁から繰り返し暖水が波及した。

◎潮岬以東

- ・ 7月～10月にかけてS字状となった蛇行北上部や切り離された屈曲部が熊野灘に接近し、熊野灘～遠州灘に繰り返し黒潮系暖水が波及した。
- ・ 駿河湾、大島西水道へ向けて断続的に暖水が波及した。
- ・ 9月下旬～10月上旬にかけて黒潮は八丈島の南側を流れ、以降は三宅島～御蔵島沖付近を北東～東向きに流れた。
- ・ 房総海域の黒潮は概ね「平均的な位置」で推移したが、10月に黒潮が八丈島の南側を通過したことに伴い、一時的に著しく離岸した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 7月に黒潮系暖水の波及がみられたほか、9月にも暖水の影響がみられた。10月以降は黒潮の北上に伴う接岸傾向により、沿岸では暖水波及の影響が強まった。

現 況 (2022 年 12 月 19 日現在)

(1) 黒 潮

- ・ A 型流路であり、大蛇行が継続している。
- ・ 室戸岬沖から大きく離岸した後、遠州灘沖で 30°N 付近まで南下し、石廊崎沖に北上した後、御蔵島付近から北東へ流れている。

(2) 薩南～房総海域

◎薩南海域

- ・ 黒潮北縁は、「接岸」している。

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬～足摺岬沖では「やや離岸」、室戸岬～潮岬沖で「かなり離岸」～「著しく離岸」している。

◎潮岬以東

- ・ 熊野灘～遠州灘沖に、黒潮系暖水がみられる。
- ・ 伊豆諸島海域は、暖水に覆われている。
- ・ 黒潮は、野島崎沖で平均的な位置を流れている。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 暖水に覆われている。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

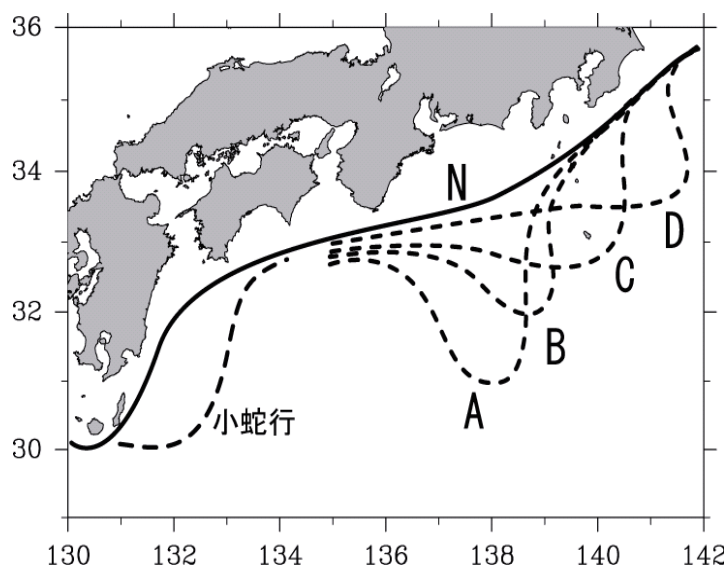


図 1 黒潮流型の分類

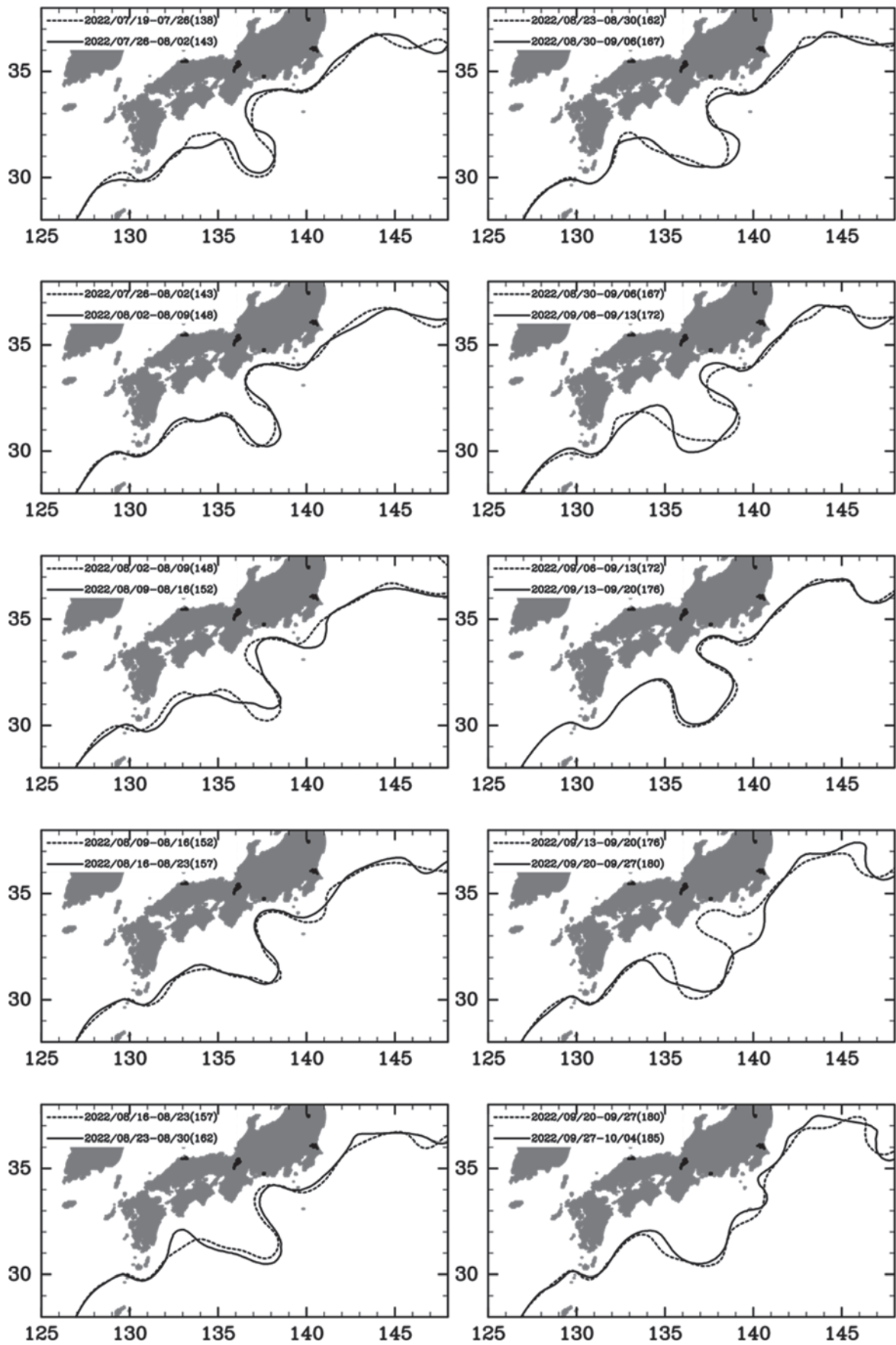


図2 黒潮流軸のパターン

(2022年7月~10月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

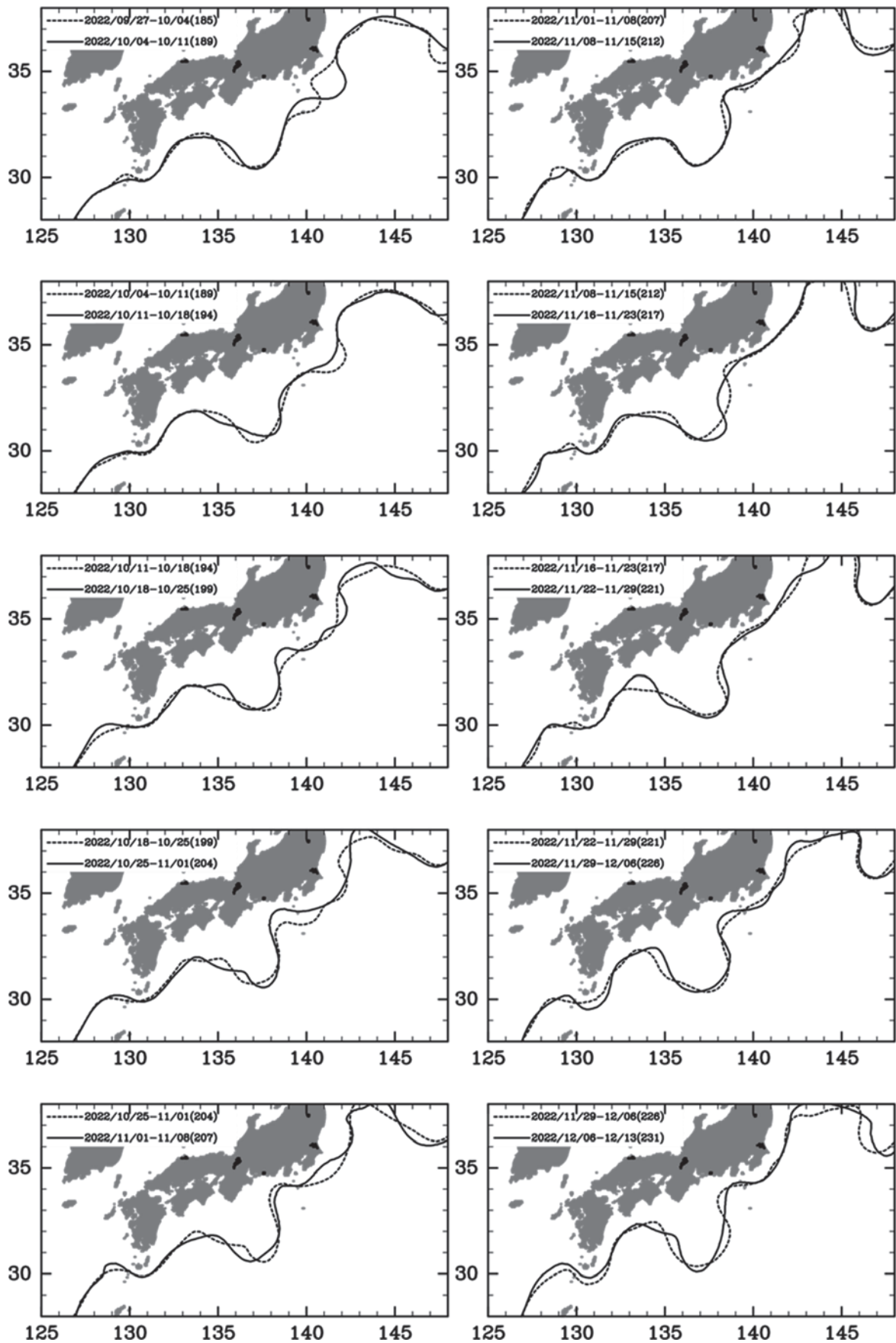


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2022年10月~12月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2023年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2023年級群）、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）、3歳魚（2020年級群）、4歳以上（2019年級群以上）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年を下回る。日向灘～豊後水道南部西側では前年並。豊後水道中南部東側では前年を下回る。宿毛湾～熊野灘では前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：北薩～豊後水道南部西側では、期前半は15 cm～20 cm前後（1歳以上）、期後半は7 cm～12 cm前後（0歳魚）主体。豊後水道中南部東側では、5 cm～10 cm前後（0歳魚）主体。宿毛湾～紀伊水道外域では、14 cm未満（0歳魚）および14 cm以上（1歳以上）が漁獲される。熊野灘では14 cm以上（1歳以上）主体。

2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：駿河湾～相模湾では前年並～下回る。

(2) 漁期：伊勢・三河湾では操業が見込まれない。駿河湾～相模湾では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：駿河湾～相模湾西部では、期前半は15 cm～20 cm前後（1歳魚～3歳魚）、期後半は12 cm以下（0歳魚）主体。相模湾東部では13 cm～15 cm前後（1歳魚）主体。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：前年並～上回る。

(2) 漁期・漁場：まき網の漁場は、1月は常磐南部～三陸南部海域、2月～5月は犬吠埼沖～常磐南部海域、6月は犬吠埼沖～三陸南部海域で形成され、6月下旬には道東海域でも形成される。定置網では、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて入網がみられる。

(3) 魚体：10 cm～15 cm前後（1歳魚）、13 cm～17 cm前後（2歳魚）、15 cm～20 cm前後（3歳魚）、17 cm以上（4歳以上）。

漁況の経過（2022年7月～11月）および見通し（2023年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1,000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って急減し、2002年以降2009年まで10万トン前後の低い水準で推移した。その後、比較的良好な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2014年には100万トンを上回った。その後も良好な加入が続いたことにより資源量はさらに増加して、2021年は443万トンと推定された（2022年度資源評価）。

2019年級群（4歳）以上は、最近10年（以下、近年）において高い加入量の年級群で構成されている。

2022 年における 3 歳以上としての漁獲状況は前年並であった。4 歳以上の推定残存資源量は前年並～下回る水準であり、近年の高水準を維持する。

2020 年級群（3 歳魚）は、加入量が 697 億尾と推定されており、2019 年級群を上回る値となっている。2022 年における 2 歳魚としての漁獲状況は前年並であった。2020 年級群の推定残存資源量は、2019 年級群の同時期を上回っている。

2021 年級群（2 歳魚）は、加入量が 617 億尾と推定されており、2020 年級群と同程度の加入水準となっている。2022 年における 1 歳魚としての漁獲状況は前年並であった。2021 年級群の推定残存資源量は、2020 年級群の同時期と同程度である。

2022 年級群（1 歳魚）は、2022 年における 0 歳魚としての漁獲状況（主に西日本海域）は、前年を下回っている。一方、沖合域においては、5 月～6 月の移行域幼稚魚調査（水産資源研究所）において前年並の CPUE（Catch Per Unit Effort：単位努力量当たり漁獲量）が見られ、直近の 9 月～10 月の北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所）に基づく加入量指数も前年並となった。ただし、6 月～7 月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所）においては、近年の高水準は維持するが前年を下回る CPUE となった。現時点では不確実であるが、近年は沖合回遊群が資源の中心であることを踏まえ、2022 年級群の加入量は前年並の水準と考えられる。

2023 年級群（0 歳魚）については、現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

北薩～熊野灘での 7 月～11 月の漁獲量は 800 トンと前年同期（1.2 万トン）を大きく下回った。ほとんどの海域で前年を大きく下回る漁獲となっていた（漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値）。

・来遊量：北薩～薩南海域では、4 月まで 1 歳魚（2022 年級群）、5 月以降は 0 歳魚（2023 年級群）が漁獲の主体となる。今期の漁獲の主体となる 2022 年級群の漁獲状況が低調に推移していることから、来遊量は前年を下回ると予測される。

日向灘では、5 月まで 1 歳以上、6 月は 0 歳魚が漁獲の主体となる。今期の漁獲の主体となる 1 歳以上の漁獲量の予測値（三重県・高知県・鹿児島県のまき網漁獲量に基づく）は、現時点で前年と同程度であるため、来遊量は前年並と予測される。

豊後水道南部西側では、3 月まで 1 歳魚および 2 歳魚、4 月以降は 0 歳魚が漁獲の主体となる。今期の漁獲の主体となる 2022 年級群の漁獲状況が低調に推移していることから、来遊量は低調であった前年並と予測される。

豊後水道中南部東側では、0 歳魚が漁獲の主体となる。前期の漁獲状況が前年を大きく下回ったことから、来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾、土佐湾では、0 歳魚および 1 歳以上が漁獲される。今期の漁獲の主体となる 2022 年級群の漁獲状況は、まき網、定置網ともに低調に推移していることから、来遊量は低調であった前年並と予測される。

紀伊水道外域西部では、0 歳魚が漁獲の主体となる。本海域においては年間を通じて成魚を漁獲する漁業

が少ないため、漁況からの来遊量の予測は難しいが、近年の漁獲傾向から、来遊量は前年並となる。

紀伊水道外域東部では、1歳以上および0歳魚が漁獲される。本海域において、1そうまき網は2017年以降、定置網は2016年以降、低調に推移している。また、潮岬沖での黒潮の離岸傾向が継続した場合、マイワシ漁場の形成条件は悪いと考えられる。以上より、来遊量は低調であった前年並と予測される。

熊野灘では、1歳以上が漁獲の主体となる。太平洋系群の資源量は増加しているが、房総～伊豆諸島周辺海域で大規模な産卵場が形成されると、本海域への産卵親魚の来遊は少なくなる傾向があり、黒潮大蛇行が継続する今期も同様の状況になる可能性がある。また、沿岸域の1歳魚および2歳魚については、秋季にまとまった漁獲が見られていない。以上より、全体としての来遊量は低調であった前年並と予測される。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。

- ・魚体：近年の出現状況から、北薩～豊後水道南部西側では、期前半は15 cm～20 cm前後の1歳以上、期後半は7 cm～12 cm前後の0歳魚が主体となる。豊後水道南部東側では、5 cm～10 cm前後の0歳魚が主体となる。宿毛湾～紀伊水道外域では、14 cm未満の0歳魚および14 cm以上の1歳以上が漁獲される。熊野灘では14 cm以上の1歳以上が漁獲される。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

伊勢・三河湾～相模湾での7月～11月の漁獲量は、0.3万トンと前年同期（1.5万トン）を下回った。伊勢・三河湾で大きく下回ったことの影響が大きい。相模湾では低調であった前年を上回る漁獲となった。

- ・来遊量：伊勢・三河湾では、今期の操業はなく、前年同様に魚体の大型化を図り7月以降の操業となる。

駿河湾、相模湾西部では、期前半は1歳魚～3歳魚（2022年級群～2020年級群）、期後半は0歳魚（2023年級群）が漁獲の主体となる。今期は、南下回遊する産卵親魚が主に漁獲されると考えられる。マイワシ太平洋系群の親魚量は前年並であり前年同様の来遊が期待されるが、海況次第では前年を下回ることも考えられる。以上より、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

相模湾東部では、1歳魚が漁獲の主体となる。今期の漁獲の主体となる2022年級群は、沖合域調査等により2021年級群と同程度の比較的高い資源水準と推定されている。そのため、本海域に沖合から来遊しやすい海況（暖水波及等）となった場合は前年同様の漁獲が期待されるが、海況次第では前年を下回ることも考えられる。以上より、今期の来遊量は前年並～下回ると予測される。

- ・漁期：駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。

- ・魚体：近年の出現状況から、駿河湾、相模湾西部では、期前半は15 cm～20 cm前後の1歳魚～3歳魚が主体となり、期後半は12 cm以下の0歳魚が主体となる。相模湾東部では13 cm～15 cm前後の1歳魚が主体となる。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

道東沖のまき網漁業は、6月下旬～10月まで操業が行われ、漁獲量は22.5万トンと前年同期（23.5万トン）並であった。房総～三陸海域のまき網漁業の7月～11月の漁獲量は、3.4万トンと前年同期（1.8万トン）を上回った。房総以北の定置網等の7月～11月の漁獲量は、1.4万トンと前年同期（1.2万トン）並であった。

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）、3歳魚（2020年級群）主体に4歳以上（2019年級群以上）が混じる。

資源状態を反映し、2歳以上の来遊量は前年並～上回る高水準になると考えられる。1歳魚の来遊量は、現時点では不確実であるが、沖合域での調査結果から前年並と考えられる。以上より、全体としての来遊量は前年並～上回ると予測される。ただし漁獲量は、まき網の操業状況に左右される。

・漁期・漁場：まき網の漁場は、1月は常磐南部～三陸南部海域、2月～5月は犬吠埼沖～常磐南部海域、6月は犬吠埼沖～三陸南部海域で形成され、6月下旬には道東海域でも形成される。定置網では、仙台湾～三陸南部海域において、期を通じて入網がみられる。

・魚体：近年および直近の出現状況から、1歳魚は10 cm～15 cm前後、2歳魚は13 cm～17 cm前後、3歳魚は15 cm～20 cm前後、4歳以上は17 cm以上。まき網では、1月は3歳以上、2月は2歳魚、3月以降は2歳以上が主体となる。定置網では、期前半は2歳以上、期中盤以降は1歳魚および2歳魚が主体となる。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2023年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2023年級群）、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域、日向灘では前年を下回る。豊後水道南部西側では前年並。豊後水道中南部東側では前年を下回る。宿毛湾・土佐湾では前年並～下回る。紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：12 cm未満の0歳魚、1歳魚主体。

2. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘、渥美外海、駿河湾ではほとんど漁獲されない。相模湾西部では前年並。相模湾東部では前年並～下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：8 cm～12 cmの1歳魚主体。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総海域では前年を下回る。三陸南部海域では前年並。常磐海域、三陸北部海域ではまとまった漁獲がない。道東海域では主たる漁獲対象とならない。

(2) 漁期・漁場：房総沿岸海域の2そうまき網では期を通じて散発的に漁獲される。三陸海域の定置網では1月まで漁獲される。常磐～房総海域、道東海域の1そうまき網の主な漁獲対象にはならない。

(3) 魚体：7 cm～11 cmの1歳魚を主体に、9 cm～13 cmの2歳魚も漁獲される。

漁況の経過（2022年7月～11月）および見通し（2023年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、令和4（2022）年度資源評価において、2002年の291万トンを経済的に減少傾向に転じ、2018年に9.5万トンの最小値となった後、増加に転じて2021年は24.7万トンと推定された。資源動向は親魚量の最近5カ年の推移から増加傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく、資源状態に応じて黒潮親潮移行域まで広く分布する。

令和4年度資源評価に基づくと、2021年級群（2歳魚）は加入量が427億尾と推定されており、2020年級群の344億尾を上回った。水産資源研究所が実施している沖合域の調査船調査では、2022年の北西太平洋北上期浮魚類資源調査における推定1歳以上のCPUE（有漁点のCPUE、以下同様）と出現率（全調査点中の有漁点の割合）は前年を下回った。一方、2022年の北西太平洋秋季浮魚類資源調査（以下、秋季調査）における推定1歳以上のCPUEと出現率は前年と同程度であったものの、2013年以前の水準には回復

していない。これらのことから、2021年級群は低水準であると推測される。

2022年級群（1歳魚）は、0歳魚として2022年7月～11月に東海海域を中心に漁獲され、その漁獲量は前年並であった。2022年の秋季調査における推定0歳魚のCPUEは前年を下回り、前年調査のような東経155°以東の分布は認められなかった。一方で、出現率や分布中心は前年と同様であり、三陸北部～道東海域を中心に分布した。これらのことから、2022年級群は2021年級群と同程度か下回る水準と推測される。

2023年級群（0歳魚）は、現時点でその水準を予測することは困難であるが、1歳以上の親魚量が低水準と推測されることから低水準である可能性が高いと考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

・来遊量：北薩～薩南海域では、1月～3月に漁獲の主体となる1歳魚（2022年級群）は、期を通じて低調な漁が続いていることに加え、周辺海域のシラス秋漁についても低調な漁模様が継続していることから来遊量は前年を下回ると予測される。

日向灘では、近年、沿岸発生群が漁獲の主体となっている。1月～5月の漁獲量は、前年10月～12月の高知県（宿毛湾）まき網漁獲量と前年8月～12月の宮崎県シラス漁獲量の相乗平均値と正の関係にあり、この予測値が前年の宮崎県の漁獲量を下回ることから、来遊量は前年を下回ると予測される。中型まき網による漁獲が本格化する6月の来遊量は現段階では予測が困難である。

豊後水道南部西側では、0歳魚（2023年級群）と1歳魚が漁獲の主体となる。前年同期は前年比29.7%と不調であり、4月以降に漁獲される0歳魚の来遊量は現段階では不明だが、カタクチイワシ太平洋系群の資源状態が近年は低水準であることから、来遊量は低調であった前年並と予測される。

豊後水道中南部東側では、1歳魚が漁獲の主体となる。0歳魚が主体となった2022年7月～11月におけるカタクチイワシの水揚量は前年を下回ったことから、来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では、期を通じて0歳魚、1歳以上が漁獲の対象となる。1月～6月の宿毛湾中型まき網水揚量と前年10月～11月の宿毛湾中型まき網および日向灘まき網の水揚量合計との間には正の関係が見られる。2022年10月～11月の宿毛湾中型まき網および日向灘まき網の水揚量合計は前年を下回り、この関係式からの2023年1月～6月水揚量の予測値が前年同期の水揚量を下回ることから、来遊量は前年並～下回ると予測される。

紀伊水道外域では、未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、予測が困難である。

- ・漁期：期を通じて漁獲される。
- ・魚体：12 cm未満の0歳魚、1歳魚が主体。

(2) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

- ・来遊量：熊野灘、渥美外海では、ほとんど漁獲されない。

伊勢湾では、カタクチイワシ太平洋系群の資源量は低水準と評価されており、内湾への来遊は少ないと考えられる。1月、2月に散発的に漁場が形成されるが、来遊量の予測は現段階では困難である。

駿河湾ではほとんど漁獲されない。相模湾西部では、近年は定置網で僅かに漁獲される程度である。漁獲対象となる1歳魚（2022年級群）の資源水準は、前年に引き続き低水準と推測されることから、来遊量は低調であった前年並と予測される。

相模湾東部では、近年の漁獲傾向から、今期も沖合域から来遊する1歳魚を主体に、2歳魚（2021年級群）が僅かに混じると考えられる。2022年の秋季調査の結果によると、沖合域における2022年級群の加入状況は2021年級群と同程度か下回る水準にあると推定されている。また、沖合から来遊しやすい暖水波及等の海況条件となった場合は前年同様の漁獲が期待できるものの、そうならなかった場合は前年の漁獲を下回ることも考えられる。よって、来遊量は前年並～下回ると予測される。

- ・漁期：期を通じて漁獲される。
- ・魚体：8 cm～12 cmの1歳魚主体。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：房総海域では、1歳魚（2022年級群）主体に2歳魚（2021年級群）がわずかに混じる。1歳魚は、駿河湾～熊野灘から来遊する群、房総沿岸に前年秋季に0歳魚として来遊しその後も房総沿岸に留まる群、三陸海域以北から南下してくる群が漁獲対象となると考えられる。2022年の愛知県、静岡県のシラス漁獲量は極めて低調であり、今後、房総沿岸に来遊する群は極めて少ないと考えられる。また、2022年10月、11月における房総沿岸の2そうまき網の漁獲量は、前年を上回っているものの低調であり、秋季に0歳魚として房総沿岸に来遊した群も少ないと考えられる。道東海域で実施した2022年の10月浮魚類分布調査（釧路水産試験場）において0歳魚が漁獲されたが、2022年7月～11月の三陸南部海域の定置網の0歳魚漁獲量は前年を下回った。三陸南部海域で2022年11月に定置網で漁獲された魚は1歳魚主体で、前年よりも多かったが、黒潮統流が極めて北偏し、沿岸水温も前年より高く、カタクチイワシが南下しにくい海況となっており、この傾向が継続することが予測されていることから、2歳魚の来遊量は極めて少ない。以上のことから、全体としての来遊量は極めて低調で前年を下回ると予測される。

常磐海域では、近年ほとんど漁獲がないため、来遊量の予測が困難である。

三陸南部～仙台湾では、これまでの漁況経過が昨年と同様の動向を示していることや、2022年の秋季調査の結果ではCPUE等が前年並であることから、1歳魚と2歳魚を主体とした沖合加入群が南下・来遊して1月に定置網に入網すると考えられるが、来遊量は低調な前年並と予測される。2月以降は近年の傾向からほとんど水揚げがないと予測される。

三陸北部海域では、漁業情報から判断して、まとまった漁獲がない。

道東海域では、2021年と2022年の9月以降の北辰丸による調査船調査結果（釧路水産試験場）から、当海域におけるカタクチイワシの来遊量が増加傾向にあると考えられるため、予測対象期間内に道東海域に来遊する可能性はある。しかし、6月下旬より操業が始まるまき網漁業では、マイワシを中心とした漁獲が行われると考えられる。したがって、予測対象期間に本種を対象とした漁獲が行われる可能性は低い。

・漁期・漁場：資源量が多い年には、常磐～房総海域において12月以降に1そうまき網の漁場が形成されていたが、資源量の少ない近年は1そうまき網の主な漁獲対象にはならない。房総沿岸海域の2そうまき網では期を通じて散発的に漁獲される。三陸海域の定置網では1月まで漁獲される。

- ・ 魚体 : 7 cm~11 cm の 1 歳魚を主体に、9 cm~13 cm の 2 歳魚も漁獲される。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2023年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2023年級群）、1歳（2022年級群）以上。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

- (1) 来遊量：北薩～薩南海域は前年を上回る。日向灘～豊後水道南部では前年を下回る。宿毛湾・土佐湾では前年並～上回る。紀伊水道外域は前年並。熊野灘では前年並～上回る。全体としては前年並。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：前半は1歳魚（15 cm～20 cm）が主体であり、後半に0歳魚（10 cm以下）が加入する。

漁況経過（2022年7月～11月）および見通し（2023年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

太平洋および瀬戸内海における漁獲量（農林統計）は、2015年に4.9万トンと過去最高となったが、2016年以降は減少し、2020年は2.3万トンまで減少した。2021年は3.9万トンと大きく増加した。一方、卵稚仔調査で得られる卵密度データを標準化した資源量指標値（平均値を1とする相対値）は2016年に1.79と過去最高となり、2017年～2019年はやや減少したものの1.36～1.64と比較的高い水準で推移したが、2020年、2021年は0.84、0.77と減少した。これらのことから2022年度の資源評価においては、資源は減少傾向にあると判断されている。なお2022年1月～11月の鹿児島県～三重県の主要港水揚量は21,835トンと、多かった前年同期（37,353トン）を下回り、近年では少なかった2020年同期（22,610トン）並であった。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

本予測期間（2023年1月～6月）は、前半は1歳魚（2022年級群）主体の漁況になることが推測されるため、2022年後半期（7月～11月）の漁況等から、1歳魚の来遊量を予測した。期後半には0歳魚（2023年級群）が加入するが、現時点での予測は困難である。

予測対象海域に相当する鹿児島県～三重県の主要港における前半期（1月～6月）水揚量と後半期（8月～12月）水揚量には、強い正の関係がある。一方、後半期（7月～11月）水揚量と翌年前半期（1月～6月）水揚量にも、弱いながらも統計的には有意な正の関係がある。2022年7月～11月の水揚量は18千トンであった。2000年～2021年の後半期（7月～11月）水揚量と翌年前半期（1月～6月）水揚量の間を用いて、2023年前半期（1月～6月）の水揚量は8.3千トンと予測された。これは2022年同期水揚量（4千トン）の203%に相当する。しかし資源量指標値が低水準にあること、漁獲の主体である日向灘～豊後水道南部で2022年7月～11月の漁況が低調であり、今後も低調に推移すると予測されていることから、本予測期間である2023年前半期（1月～6月）の来遊量は前年並と予測される。

北薩および薩南海域では、1月～4月は1歳魚（2022年級群、15 cm～20 cm）主体で、5月～6月は0歳魚（2023年級群、5 cm～10 cm）が主体となる。1月～4月に主体となる1歳魚の漁獲量は、まき網では2022年10月に前年を大きく下回ったが、その他の月は前年並～上回って推移した。また、北薩海域の棒受網でも前年を上回って推移していることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

日向灘では、1月～4月は1歳以上（2022年級群以上、15 cm～20 cm以上）、6月以降は0歳魚（2023年級群）が主体となる。1月～4月に主体となる1歳以上の漁況は、鹿児島県主要4港の前年10月～12月の漁況と関係性がみられている。2022年11月時点で鹿児島県漁獲量から求めた予測値は前年の宮崎県の漁獲量を下回っていることから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、1月～3月は1歳魚（2022年級群、15 cm～20 cm）、4月～6月は0歳魚（2023年級群、10 cm前後）が主体となる。2022年7月～11月の漁獲の主体は2022年級群（0歳魚）であり、2023年はこれらの個体が1歳魚となり漁獲される可能性がある。2022年7月～11月のまき網水揚量は1876.9トンと前年を下回っており、今期も引き続き低調で推移すると考えられることから、来遊量は前年並と予測される。

豊後水道南部東側では、今期は0歳魚（2023年級群）が漁獲の主体となる。これらの個体の産卵親魚になり得る2022年7月～11月の0歳魚（2022年級群）および1歳魚（2021年級群）の水揚量は前年同期を大きく下回ったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾および土佐湾では、宿毛湾中型まき網が漁獲の中心である。宿毛湾中型まき網における1月～6月の水揚量と8月～12月期の水揚量には有意な正の相関がみられ、関係式から予測される2023年1月～6月の水揚量は1,841トンと前年（415トン）より多いことから、今期の来遊量は前年並か上回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、年間を通じて成魚を漁獲対象とする漁業が少ないため、漁況から来遊水準を判断することが難しい。近年の漁獲が低調に推移していることから、今期の来遊量も前年並に低いと予測される。

紀伊水道外域東部では、1そうまき網および棒受網による漁獲量は2016年以降減少している。熊野灘南部における定置網および潮岬周辺における棒受網による漁獲量は、総じて減少傾向である。また、黒潮が潮岬で離岸のまま推移した場合、ウルメイワシの漁場形成条件は悪いと考えられる。これらのことから、今期の来遊量は前年並と予測される。

熊野灘では1歳魚（2022年級群、15 cm～20 cm）および2歳以上（2021年級群、20 cm以上）が主体となる。近年の熊野灘では冬春季の成魚の漁期の期間、漁獲量ともに減少傾向が著しい。2022年2月～3月には体長21 cm～24 cmの推定2歳以上が漁獲主体となった。今期の2歳（2021年級群）以上の来遊量は、近年の漁況から、低調であった前年並と予測される。一方、一部が産卵に加わると予想される明け1歳魚は、2022年7月～11月の漁況から前年を上回ると予測される。以上から、今期の来遊量は前年並～上回ると予測される。なお、熊野灘ではウルメイワシは積極的に漁獲されないため、漁獲が来遊を反映しない可能性もある。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2023年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2023年級群）、1歳魚（2022年級群）、
2歳魚（2021年級群）、3歳（2020年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南海域では前年並。日向灘では前年を下回る。豊後水道南部西側、豊後水道東側では前年並。宿毛湾・土佐湾では前年を下回る。

(2) 魚体：北薩～薩南海域では1歳魚、2歳魚主体、日向灘、豊後水道南部西側、豊後水道東側では1歳魚が主体、宿毛湾・土佐湾では0歳魚、1歳魚が主体。0歳魚は14cm以下、1歳魚は14cm～20cm、2歳以上は20cm以上。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：紀伊水道外域では前年並、熊野灘では前年を上回る。

(2) 魚体：紀伊水道外域西部では0歳魚主体、紀伊水道外域東部では2歳魚～4歳魚主体、熊野灘では1歳魚主体に0歳魚および2歳以上が混じる。0歳魚は12cm以下、1歳魚は14cm～21cm、2歳以上は21cm以上。

3. 相模湾（定置網）

(1) 来遊量：伊豆東岸では前年を下回る。西湘地区では前年を上回る。

(2) 魚体：主体となる1歳魚は16cm～22cm。

漁況の経過（2022年7月～11月）および見通し（2023年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが、1997年以降減少した。2009年～2013年にかけて増減を繰り返した。2015年～2020年は4.3万トン～5.1万トンで推移している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降3.2億尾～7.1億尾と低い水準で推移している。令和4年度（2022年度）資源評価において、2021年の資源量は5.0万トン、親魚量は2.7万トンと推定された。

2020年級群（3歳魚）の加入量は3.7億尾と推定され、2022年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ない。

2021年級群（2歳魚）の加入量は4.0億尾と推定された。低水準ながら2022年前半の漁獲の主体となったが、2022年後半の漁獲は低調に推移しており、残存資源量は少ないと考えられる。

2022年級群（1歳魚）は、いずれの海域でも漁獲対象になる。現状での各県地先の加入量の指標値は、宮崎県南部定置網アジ仔CPUE（4月～6月）、伊勢湾小型底びき網（まめ板）当歳魚漁獲量（4月～11月）では前年を上回っているが、宇和島港まき網ゼンゴCPUE（4月～11月）、宿毛湾まき網ゼンゴCPUE（4月～11月）、串本棒受網当歳魚漁獲量（5月～6月）、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量（4月～11月）、千葉県定置網当歳魚漁獲量（10月～11月）は前年を下回っている。4月～11月の指標値の相乗平均は2021年級群を下回ることから、2022年級群の加入量は2021年級群を下回ると考えられる。

2023年級群（0歳魚）は期後半から漁獲されると考えられるが、現時点での予測は困難である。

2. 来遊量、漁期・漁場

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに前期の漁況に基づき予測し

た。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚（2023年級群）：14 cm以下、1歳魚（2022年級群）：15 cm～20 cm、2歳魚（2021年級群）：21 cm～24 cm、3歳（2020年級群）以上：25 cm以上。3歳以上の年齢に対応した体長区分は現状では困難である。なお近年の報告によると、相模湾以東では尾叉長20 cm台に3歳から10歳以上の高齢魚がみられることが明らかになってきている。したがって相模湾については報告された年齢体長キーから判断し、0歳魚：19 cm以下、1歳魚：19 cm～22 cmとした。

(1) 北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、1歳魚、2歳魚（2022年級群、2021年級群）が漁獲の主体となる。1月～6月の漁獲量は、前年11月の漁獲量と正の関係が認められることから、今期の漁獲量は前年並と考えられる。

日向灘では、1歳魚が漁獲の主体となる。日向灘のまき網は、前年7月～12月漁獲量と高知県（宿毛湾）前年7月～11月まき網漁獲量の相乗平均値により漁獲動向を判断している。11月までの予測値が前年の宮崎県の漁獲量を下回ることから、日向灘における2023年1月～6月の漁獲量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、1歳魚が漁獲の主体となる。2022年1月～3月の水揚げは2歳魚（2020年級群）主体で、水揚量は前年（2021年）を大きく上回ったが、4月以降は前年の半分程度の水揚げであった。マアジ太平洋系群の加入量は低調な状況が継続していることを考慮し、予測は低調であった前年並とした。

豊後水道東側では、1歳以上が期間を通じて漁獲され、例年では5月ごろから0歳魚の漁獲が始まる。0歳魚の来遊水準の予測は難しいが、2023年に1歳魚となるゼンゴ（2022年級群）の水揚量が前年と同等であることから1歳魚の来遊水準は前年並であると予測される。

宿毛湾・土佐湾では、0歳魚と1歳魚が主体となる。中型まき網で2023年に1歳魚となる2022年級群の来遊が前年より少ないことから、来遊量は前年を下回ると考えられる。

(2) 紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、小型定置網、大型定置網での小型魚の漁獲が主体となる見込みである。漁況から来遊水準を判断することが難しい。

紀伊水道外域東部では、2歳魚～4歳魚（2021年級群～2019年級群）が漁獲の主体となる。今後も潮岬沖で黒潮が離岸傾向で推移すると予測され、来遊および漁場形成条件は2018年～2022年と類似する可能性が高いため、2023年1月～6月の来遊は前年並で平年を下回ると予測する。

熊野灘では、1歳魚（15 cm～22 cm）が主体で、0歳魚（5 cm～12 cm）および2歳以上（22 cm以上）も混じる。2022年7月～11月の漁況から、まき網、定置網で漁獲される0歳魚は前年を大きく上回っており、今期漁獲主体となる1歳魚は前年を上回ると予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸では、1歳魚（2022年級群）が漁獲の主体となる。2016年～2021年4月～11月の0歳魚推定漁獲尾数と翌年1月～6月の1歳魚以上の漁獲尾数との間には正の関係がみられ、この関係式に2022年4月～11月の0歳魚推定漁獲尾数を代入すると、2023年1月～6月の1歳魚の漁獲尾数は前年を下回ると予測される。

西湘地区では、4月～6月を中心に1歳魚（2022年級群）が漁獲される。2022年下半年のジンダ漁獲量は前年を大きく上回ったことから、2023年上半年のマアジ漁獲は前年を上回ると予測される。

(4) 房総～三陸海域の漁獲情報

房総～鹿島灘海域における北部まき網の2022年7月～11月の漁獲量は202トン（TACシステム）と、低調であった前年同期1,105トンを大きく下回った。

仙台湾～三陸海域では、宮城県の2022年7月～11月の漁獲量は536トンと前年を上回った。岩手県の2022年7月～11月の定置網による漁獲量は136トンで前年を下回った。青森県では2022年7月～11月の八戸の漁獲量は4トンで前年を下回り、平館の定置網による漁獲量は15トンで前年並であった。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2023年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）、3歳魚（2020年級群）、
4歳魚（2019年級群）、5歳魚（2018年級群）、6歳（2017年級群）以上。
年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

(1) 来遊量：マサバは北薩～薩南海域、豊後水道南部では前年並、日向灘では前年並～上回る。ゴマサバは北薩～薩南海域では低調であった前年を上回り、土佐湾では前年並。サバ類全体としては前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは27 cm～38 cm（3歳魚～6歳魚）主体。ゴマサバは北薩～薩南海域、日向灘では27 cm～38 cm（3歳魚～6歳魚）主体、土佐湾では31 cm～38 cm（3歳魚～5歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは前年並。ゴマサバは前年並。サバ類全体としては前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは28 cm～35 cm（2歳魚～4歳魚）主体、ゴマサバは26 cm～35 cm（2歳魚～4歳魚）主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは前年並～上回る。ゴマサバは低水準。サバ類全体としては前年並～上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは25 cm～40 cm（2歳以上）主体に20 cm～30 cm（1歳魚）も漁獲される。ゴマサバは30 cm～40 cm（2歳以上）主体に漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

(1) 来遊量：マサバ3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年を下回る。5歳魚は前年を上回る。6歳以上は前年を上回る。マサバ全体としては前年並～下回る。ゴマサバは前年を下回る。サバ類全体としては前年並～下回る。

(2) 漁期・漁場：マサバは漁期当初は伊豆諸島北部海域および三宅島周辺海域が主漁場となり、盛漁期には銭洲周辺海域にも漁場が形成される。期後半は伊豆諸島北部海域が主漁場となる。ゴマサバは期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となり、銭洲周辺海域および三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

(3) 魚体：マサバは26 cm～39 cm（4歳以上）主体に漁獲される。ゴマサバは28 cm～35 cm（3歳魚）および31 cm以上（4歳以上）主体に漁獲される。

5. 犬吠埼沖～三陸海域（まき網、定置網、底曳網）

(1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年を下回る。5歳魚は前年を上回る。6歳以上は前年を上回る。マサバはまき網では低調であった前年並、定置網、底曳網では前年を下回る。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては低調であった前年並。

(2) 漁期・漁場：まき網では期を通じて犬吠埼沖～常磐南部海域が主漁場となり、期後半には三陸南部海域にも漁場が形成される。三陸海域の定置網では1月、2月および4月以降に漁獲される。三陸海域の底曳網では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは、期を通じて22 cm～31 cm（3歳以下）主体に、1月、2月および4月以降は28 cm～37 cm（4歳以上）も漁獲される。

漁況の経過（2022年7月～11月）および見通し（2023年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代前半に極めて低い水準にあったが、2013年以降の加入量水準の高い年級群の発生により増加傾向を示し、2013年～2021年の資源量は、資源量を推定している1970年以降で最高水準となっている。2013年級群以降、成長および成熟の遅れがみられている。

2017年級群（6歳魚）は、2022年12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が106億尾と近年（2012年～2021年）の平均（107億尾）程度の水準である。

2018年級群（5歳魚）は、推定加入量が149億尾と近年の平均を上回る水準である。

2019年級群（4歳魚）は、推定加入量が53億尾と近年の平均を下回る水準である。

2020年級群（3歳魚）は、推定加入量が92億尾と近年の平均程度の水準である。

2021年級群（2歳魚）は、推定加入量が131億尾と近年の平均を上回る水準である。

2022年級群（1歳魚）の加入量は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所、6月～7月）、北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所、9月～10月）および再生産関係から、近年の平均程度の水準と推定されている。

2) ゴマサバ

資源量は2004年～2011年に高い水準にあったが、2011年以降、減少傾向を示し、2021年の資源量は、資源量を推定している1995年以降で最低水準となっている。

2018年級群（5歳魚）は、2022年12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が2.6億尾と近年の平均（3.8億尾）を下回る水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2019年級群（4歳魚）は、推定加入量が1.8億尾と近年の平均を下回る水準である。

2020年級群（3歳魚）は、推定加入量が2.4億尾と近年の平均を下回る水準である。

2021年級群（2歳魚）は、推定加入量が1.4億尾と近年の平均を大きく下回る水準である。

2022年級群（1歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均を下回る水準と推定されている。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚（2022年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。2歳魚（2021年級群）は、加入量が近年の平均を上回る水準であり、来遊量は前年を上回る。3歳魚（2020年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。4歳魚（2019年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。5歳魚（2018年級群）は、加入量が近年の平均を上回る水準であり、来遊量は前年を上回る。6歳魚（2017年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年を上回る。ただし、成長および成熟の遅れがみられていることから、加入量水準から予測される来遊量よりも実際の来遊量は低くなる可能性がある。また、常磐沖の黒潮続流が北偏していることから魚群の南下が遅れており、1月以降も北偏が継続することが予測されている。これらのことを考慮するとマサバの来遊量は、犬吠埼以北のまき網では低調であった前年並、三陸海域の定置網、底曳網では前年を下回り、伊豆諸島周辺海域では前年並～下回り、紀伊水道外域、豊後水道南部、薩南～北薩海域では前年並、熊野灘、日向灘では前年並～上回るなど、低調であった前年並となる海域が多い。

(2) 漁期・漁場、魚体

犬吠埼以北海域でのまき網漁業では、8月、9月に八戸沖でスルメイカとともに漁獲がみられたが、7月～10月は低調に推移した。道東沖では8月にわずかに漁獲された程度であった。11月は八戸沖～三陸南部で漁場が形成されたが低調に推移した。7月～11月の漁獲量は、犬吠埼以北海域におけるまき網では0.6万トンと前年同期（2.2万トン）を大きく下回り、千葉県以北の定置網・底曳網等では1.8万トンと前年同期（2.2万トン）を下回り、伊豆諸島以西の海域では5.8千トンと前年同期（6.1千トン）並であった。（漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値）

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は以下のとおり。犬吠埼以北海域のまき網では、期を通じて犬吠埼沖～常磐南部海域が主漁場となり、期後半には三陸南部海域にも漁場が形成される。期を通じて3歳以下が主体に漁獲され、1月、2月および4月以降は4歳以上も漁獲される。三陸海域の定置網では、1月、2月および4月以降に漁獲される。三陸海域の底曳網では期を通じて漁獲される。伊豆諸島周辺海域では、4歳以上が主体に漁獲される。漁場形成は黒潮流路変動に強く影響される。黒潮流路はA型で推移し、銭洲周辺、三宅島付近を流れると予測されており、漁期当初には伊豆諸島北部海域および三宅島周辺海域に漁場が形成される。盛漁期には銭洲周辺海域にも漁場が形成される。期後半の漁場は伊豆諸島北部海域となる。熊野灘～日向灘では昨年同様にマサバ主体の漁場形成がみられ、2歳以上が主体に漁獲される。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚（2022年級群）：26 cm以下、2歳魚（2021年級群）：21 cm～30 cm、3歳魚（2020年級群）：24 cm～32 cm、4歳魚（2019年級群）：26 cm～34 cm、5歳魚（2018年級群）：28 cm～35 cm、6歳（2017年級群）以上：31 cm以上。（各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている）

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚（2022年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準と考えられ、来遊量は低調であった前年並。2歳魚（2021年級群）は、加入量が近年の平均を大きく下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。3歳魚（2020年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は低調であった前年を上回る。4歳（2019年級群）以上は残存資源量が少なくなっている。ゴマサバの来遊量は、北薩～薩南海域では低調であった前年を上回り、日向灘、豊後水道南部、熊野灘、犬吠埼以北では混獲される程度、土佐湾、紀伊水道外域では低調であった前年並、伊豆諸島周辺海域では前年を下回るなど、全体としては低水準となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

7月～11月の漁獲量は、北薩～紀伊水道外域では7.8千トンと前年同期（3.8千トン）を上回り、熊野灘では9.4百トンと前年同期（7.4百トン）を上回り、伊豆諸島周辺海域では3.8千トンと前年同期（3.1千トン）並、犬吠埼以北海域のまき網では5.0百トンと前年同期（5.0百トン）並、千葉県以北の定置網・底曳網等では4.2千トンと前年同期（9.1千トン）を下回った。

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は、北薩～薩南海域、日向灘では3歳魚～6歳魚主体、豊後水道南部では1歳魚、2歳魚主体、土佐湾では3歳魚～5歳魚主体、紀伊水道外域では2歳魚～4歳魚主体、熊野灘では2歳以上主体に、期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では3歳以上主体に、期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となり、黒潮流路によって一時的に銭洲周辺海域および三宅島周辺海域にも漁場が形成される。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚（2022年級群）：30 cm以下、2歳魚（2021年級群）：24 cm～33 cm、3歳魚（2020年級群）：28 cm～37 cm、4歳魚（2019年級群）：31 cm～38 cm、5歳（2018年級群）以上：33 cm以上。（各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている）

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	和歌山県水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
福島県水産海洋研究センター	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
神奈川県水産技術センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
静岡県水産・海洋技術研究所	(取りまとめ機関)
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
三重県水産研究所	